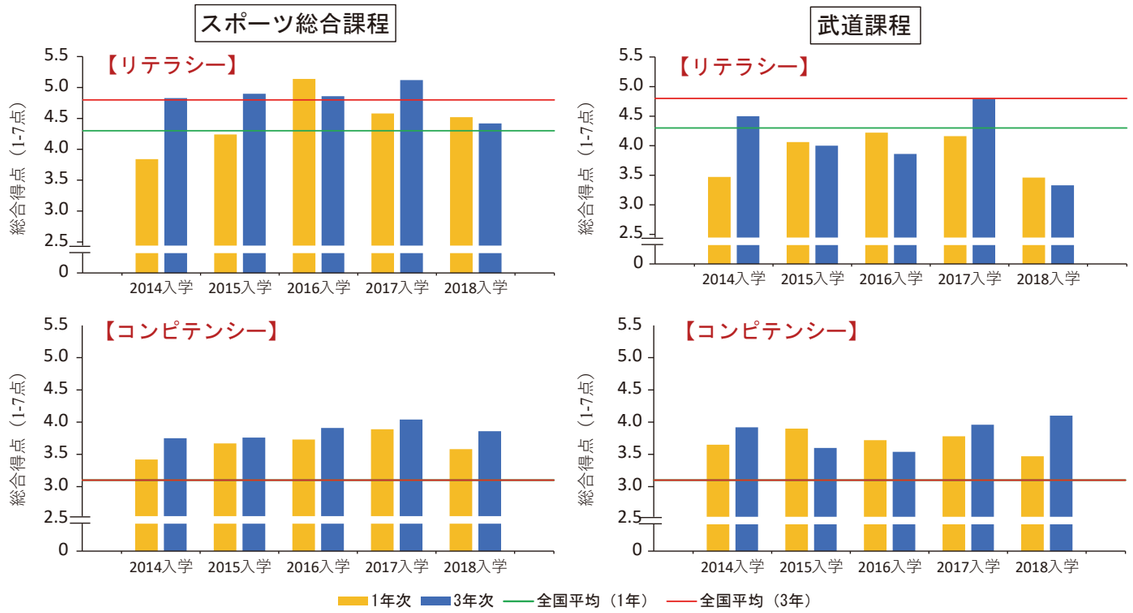
在学生における学びの軌跡：汎用的能力編

汎用的能力（PROGテスト）における1年次から3年次への経年変化



図は、体育大生の入学時（1年次）の4月から3年次の11月までの汎用的能力（PROGテスト）の入学年度ごとの変化を示したものです。また、リテラシーとは、知識（数的処理力や文脈理解力など）を使っての課題解決力を示します。コンピテンシーとは人と協力しながら問題解決を行うことができる能力を示しています。

体育大生のコンピテンシーは、入学時から全国平均値（赤いライン）よりも高く、3年次でも高いことが特徴です。現4年生の平均的な学びの軌跡をたどると、過去の先輩と同様に3年次でも伸びており、特に武道課程の学生の伸びが大きいことがわかります。

一方リテラシーは、両課程ともに1年次からの伸びが認められませんでした。この結果は、3～10分程度でテストの回答を行った数名の学生の得点が少しばかり影響していることもありますが、全体的に基礎学力や一般教養の学修、さらには課題解決に関わる演習（例えば総合演習やゼミナールでの活動）が不足していることが考えられます。コロナ禍の影響で、対面でのグループワークや演習が不十分なことが影響したかもしれませんが、この点の改善は、本年4月からはじまる新教育課程でも対応しますので、乞うご期待を！

1年間ありがとうございました

2020年4月からの教育企画・評価室での業務について、3月で1年間の任期が満了となりました。

在任中は、これまでとは違った立場から鹿屋体育大学の教育に携わることで、本学の素晴らしさと魅力を再確認することができました。また、業務を通して学生の修学のために多くの方々が動いてくださっていることを実感することができました。学生の皆さんは、これからも鹿屋体育大学の素晴らしい先生方や職員の方々からサポート受けながら、自己実現に向けて一生懸命活動して欲しいと思います。

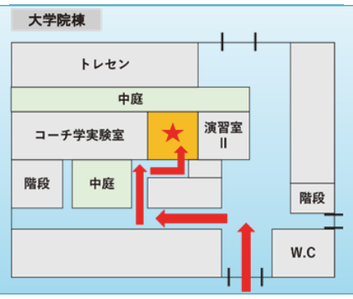
私事ですが、4月からは本学のスポーツ・武道実践科学系の講師（コーチング学（野球））を務めることになりました。これからさらに鹿屋体育大学の学生の教育・研究に貢献できることを楽しみにしています。立場は変わりますが、これからもよろしくお願いします。

教育企画・評価室
特任助教　藤井雅文

＜発行＞
鹿屋体育大学　教育企画・評価室

〒891-2393　鹿児島県鹿屋市白水町1番地
大学院棟1階
TEL&FAX：0994-46-5082
E-MAIL：kyoumu-ap@nifs-k.ac.jp

＜企画・編集＞
藤井雅文・岡田あゆみ・金高宏文



教育企画・評価室のHPもご覧ください

http://ap.nifs-k.ac.jp/

◆教員からのメッセージ
◆コロナ禍における授業形態と理解度・満足度
◆2020年度入学時の意識調査
◆PROGテストの経年変化

2021.4 VOL.9

教員から体育大生へのメッセージ

スポーツ・武道実践科学系
小澤 雄二　教授

研究キーワード
武道
教材開発
柔道コーチング

「学生の皆さんへの期待」

柔道や武道学概論などの授業と柔道部の学生支援を担当している小澤雄二です。研究の方は、安全な武道指導を目的とした用具の開発、柔道授業のための教材開発、柔道のコーチングなどを主なテーマとしています。

さて、昨今のコロナ禍においてさまざまな制約があるなか、皆さんも苦労の多い学生生活を過ごしていることでしょう。このような状況でありますが、大学生になって「自分のやりたいこと」は見つかりましたか？　即座に「はい」と答えられる人は、本当に幸運かつ素晴らしいことですから、迷わず、真っすぐに努力をしてください。

しかし、多くの人は想い、迷い、悩みながら、「自分のやりたいこと」を見つけていくのかもしれません。たとえ今、それが明確でなくても、その時々に「そのためにやるべきこと」に向き合えること自体が幸せなことであり、かけがえのない日常なのではないでしょうか。

そんな日常において、心掛けてほしいことがあります。それは日々のさまざまな決断に際して、何事もまずは自分の頭でしっかり考えて判断し、そして行動することです。その先に、皆さんにしか見えない未来があるのかもしれません。

皆さんのかけがえのない学生生活が、充実したものになることを期待しています。

「競技力向上」のその先へ

学校と教育の歴史や教師論などの教職科目を担当している山本一生（やまもといっせい）です。本学の教職課程は、中学高校の保健体育の教員免許状を取得し、教師となることを目指す課程です。

まず、教職課程履修者のみなさんに伝えたいことは、「先生を目指す」ことだけに絞るのではなく、教職での学びを幅広く活かしてほしい、ということです。部活動やアルバイト、今後の生活などでぶつかる困難に対してヒントとなる学びが、教職科目にはあるはずです。教職を通じた教養教育こそ、教員養成系大学ではない本学教職課程の重要なポイントだと思います。

次に、本学学生のみなさんに伝えたいことは、「「生徒」から「学生」へ」「「教わる」から「学ぶ」へ」「参加」から「参画」へ」という3点です。それぞれ似たような文言ですが、みなさんはどう違うと考えますか？

私は、「指示を受けるという消極的な在り方から、主体的に行動するという積極的な在り方へ」という点が重要と考えております。部活動においても、指導者の指示を受けるだけではなく、自分たちで競技力向上のためにトレーニングやパフォーマンスを考えていくでしょう。さらに様々な体験を言語化することを通して、「競技力向上」のその先を、自らの力で切り開きましょう。

ついでですが、「教授」などは職階名、「先生」は敬称です。レポートなどで「山本准教授」と書かないようにしましょう。せめて、「山本先生」にして下さい。

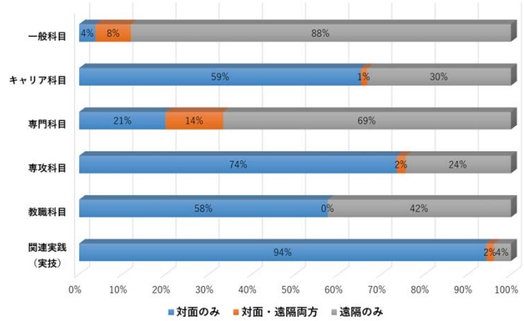
スポーツ人文・応用社会科学系
山本 一生　准教授

研究キーワード
日本教育史・中国教育史・都市史（中国青島）

コロナ禍における授業の状況

2020年度は、当初東京オリンピック・パラリンピック大会を想定して、変則的な学事日程となっていました。そこに、春先よりコロナ感染症の拡大により、入学式の中止や授業開始が約1ヶ月遅れ、例年とは異なる授業となりました。これまで誰も経験したことのない状況でしたが、どうにか2020年度予定されていた授業を概ね終えることができました。本学の事務職員並びに教職員の臨機応変な対応もさることながら、学生諸君の協力・努力なくしては、この危機を乗り越えることができなかったことを実感します。そこで、実際にコロナ禍にあった2020年度前期と、そうでなかった2019年度の前期授業でどのような違いがあったのかについて検証してみました。どんな状況でも、「学び続けることをやめない」「学びの質を保つ・高めること」を念頭に取り組んできましたが、その点をご確認下さい。

2020年前期の授業の実施方法：遠隔授業の実施率は？

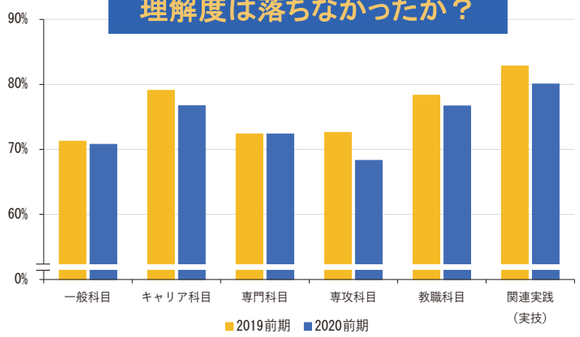


講義科目を多く含む「一般科目」「専門科目」では、WebClassやWebExを使った遠隔授業が大半を占めた。一方、講義科目の中でも「キャリア科目」「教職科目」は対面が半数の割合を占めた。また、実技を要する「専攻科目」や「関連実践科目」の多くは対面形式であった。コロナ禍であるが、体育大学としての授業の質を保証するためにも対面授業が実施されたといえる。

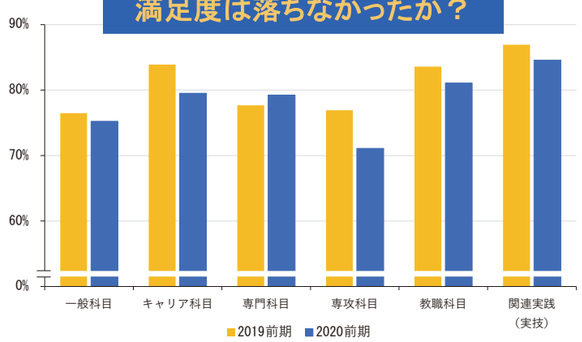
今後は、対面と遠隔の両方を使いながらの授業形態が増えていくと思われる。教職員が授業形態を工夫しながら授業の質を保証するのは当然のことであるが、学生も如何なる授業形態になっても自発的に学修できるように準備と態度の形成が期待される。

2019年前期と2020年前期の授業の理解度、満足度、授業時間外の学修時間

理解度は落ちなかったか？



満足度は落ちなかったか？

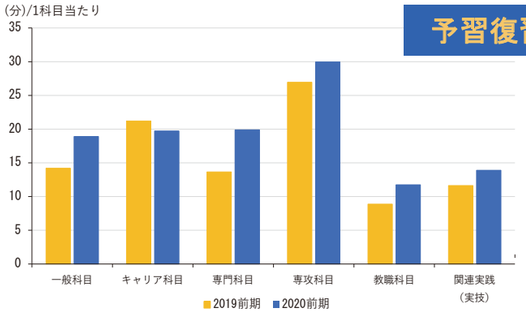


2019年度と同様に2020年度の**授業の理解度**が維持された科目は、「一般科目」「専門科目」といった遠隔授業を多く実施した講義科目の授業であった。一方、少し低下した科目は対面授業で演習を多く行った「キャリア科目」「教職科目」、さらに低下した科目は実技を多く含む「関連実技」「専攻科目」であった。

これらの違いの原因は、前述した科目群の授業形態が影響していると予想される。「一般科目」「専門科目」では、効果的に遠隔授業が実施され、理解度の維持に繋がったと考えられる。一方、「専攻科目」「関連実技」等では、感染予防の観点から、十分に実習や演習ができなかったことが理解度を低下させたと考えられる。

また、**授業の満足度**は、理解度とよく似た傾向を示した。「一般科目」はほぼ維持、「専門科目」では向上していた。これらの科目は、遠隔授業等が適切に実施され、学生の学びが充実し、満足度が維持・増加したと予想される。一方、「キャリア科目」と「専攻科目」については、例年通りのグループワークや実技実習ができないこともあり、他の科目と比較して大きく低下したと推察される。これらの科目については、対面形式、遠隔形式を含めて、なお一層の授業改善や学修の改善が求められていると考えられる。

予習復習時間は増えたか？



授業時間外学修時間は理解度や満足度とは異なり、全体的に僅かではあるが増加傾向にあった。授業での課題等が増えたこと、部活動の時間が制限され、不要不急の外出できない分、授業外での学修に時間を割けた可能性がある。

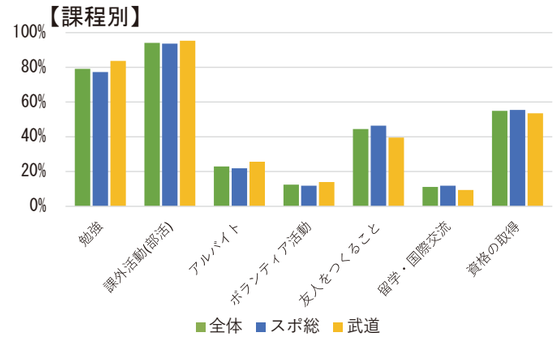
特に、「一般科目・専門科目」では5分以上長くなり、1科目当たり平均20分の学修時間になった。1科目で60-80分の授業科目もあることを考慮すると、予習や復習、さらには授業等で学んだことから派生した調べもの学修や友人との三密を避けたディスカッションなどの時間が増加することが期待される。

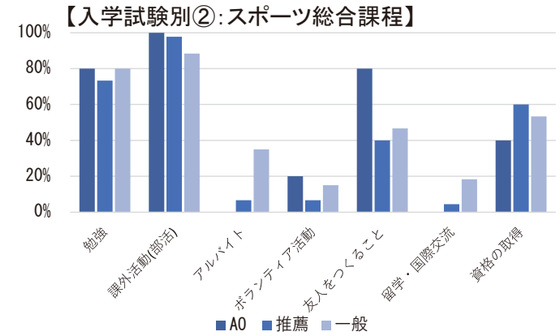
2020年度入学時アンケート調査

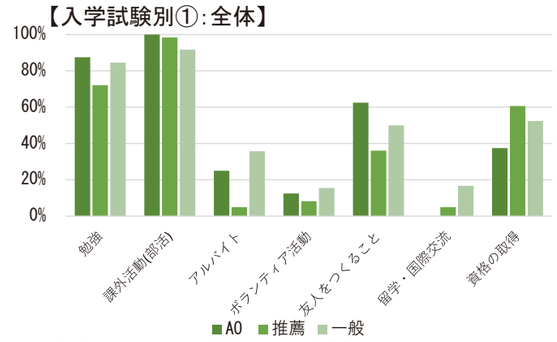
毎年、新1年生については、4月に志望動機や就職希望なども含む「入学時アンケート調査」をアドミッションセンターが実施しています。これまで、この調査結果について在学生や教員にはあまり公開されてきませんでした。しかし、「どんな思いを持って、本学に入学してきたのか」「どうして運動部に入りたいのか」などを、教職員学生が相互に理解しておくことは、学修や教育・支援を進める上で重要になると考えます。

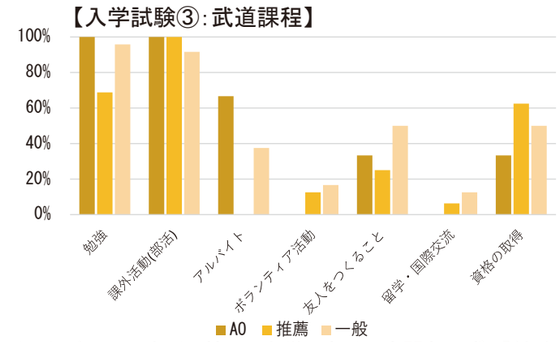
色々なアンケート項目がある中、今回は新1年生の「大学でやりたいこと」「部活動所属の理由」について紹介します。2年生以上にとっては、「どんな思いで体育大に入学してきたのか」を思い出し、初心に返る良い機会になるかもしれません。自分とは違う思いや考えを持った仲間も居ることも意識しながら、データを観るとよいでしょう。

大学でやりたいこと



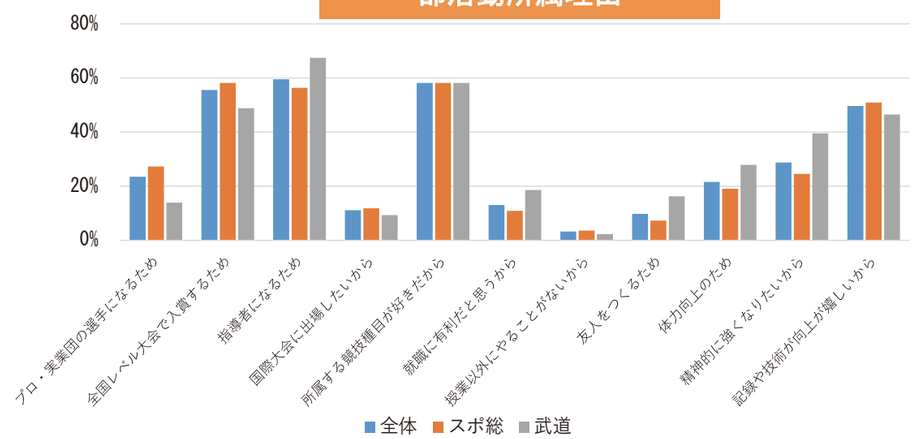






入学時においては、「勉強」よりも「部活動」をメインに考えていることが見て取れる。特に、大学であるにも関わらず、「勉強」と回答しない学生が20%も居ることに注目したい。さらに、一般入試で入学した学生よりもAO入試や推薦入試で入学した学生の方が「勉強」や「部活動」への意識が高いことがうかがえる。また、その他の項目で見ると、「友人をつくること」、「資格の取得」については半数の学生が入学時の希望として掲げている。

部活動所属理由



全体・両課程に大きな傾向差はなく、競技が好きなうえで目的意識（全国大会で入賞など）がはっきりしていることが分かる。入学時には、「自らの競技力を高める」と同時に「指導者になる」ことを意識して加入していることが注目される。また、自分自身の「記録や技術の向上」にも大きな意味を見出している。この傾向は、2年生以上の在学生の入学時と同じ傾向を示した。